

令和7年度第2回兵庫県地域創生アクション委員会 議事要旨

日 時：令和7年10月29日(水) 10:00～12:00

場 所：兵庫県庁2号館5階特別会議室

議事要旨：(発言者 敬称略)

○委員

本日は、令和7年度 戦略推進プロジェクトの進捗状況、地方創生2.0（国の動き）について議論いただく。それでは資料説明をお願いする。

＜地域創生コラボレーションプロジェクトについて＞

【事務局から資料1（P1～P17）を説明】

○委員

ひょうご地域創生フェス「カケルDAY」に一般者で参加した感想としては、非常に良いイベントであった。人と人が「つながる」ことを目的の一つにしているイベントだったが、特にプレイヤーの方が熱心であり、名刺交換をされて、「今後こういう形でつながっていきましょう」と前向きに話している場面を数多く拝見したが、それはアンケートの結果にも表れている。県内各地からいろいろな方に集っていただき、そこでつながる機会を作る事業展開は、県だからこそできることだと思うので、その趣旨に合った非常にすばらしいイベントであった。

広報が間に合わなかった点もあるかもしれないが、一般の方がもっと来場するような状況になればさらに良かったと感じた。

○委員

アンケートの結果から、プレイヤーの方々の満足度は非常に高く、特に事務局の手厚い伴走についてコメントいただいているのは良かった。地域創生フェスに向けて、アイデアの具体化に向けたプロセスをプレイヤーの方々に提供できたのは非常に良かったと思う。

良いイベントだったのであれば、なおさら一般の方に参加いただいてプレイヤーの方と交流する場になれば良いと感じた。

○委員

私は当日、ファシリテーターとして参加させていただいた。感想として、初めての試みだが多くの人が集まり、大成功だったと感じた。県内にやる気のある人、すでに取り組んでいる人、これから取り組もうと思っている人が多くおり、県にパワーがあることをその場で感じられた。

地域創生フェスやアイデアソンの日を設定したことで、参加者にとって明確な期限が生まれ、取組みへの意欲向上につながったように感じた。また、同じ兵庫県といえ、会うのに1時間、2時間かかるような人たちが、この場で一気に交流できたのはよかったです。

私自身、ファシリテーターをさせていただいた人たちとSNSでつながり、そのあとオンラインミーティングやお互いの視察提案を行うなど、次につながる動きが出始めたが、その動き始めたものをどう落とし込んでいくか、今後の展開が課題だと感じている。

○委員

私も当日にファシリテーターとして参加し、また県の別事業である地域しごとサポートセンターとしてもブースを出展していた。

ファシリテーションのところは、今まで私が出会ったことがない人達とのセッションであり、事前にオンラインで打ち合わせしていたが、皆さんすごい熱量のある方だった。当日は、特にゴールを設定しないまま討論していたが、それぞれいろいろな意見が出て、活発な議論を繰り広げることができた。当たり前かもしれないが、省内に熱量のあるプレイヤーの方たちが多くいるのだと、改めて知ることができた。

ブースにいると、いろいろな人が話し掛けてくださったが、関係者が多い印象だった。こういう企画なので、一般の方の来場は難しい一方で、イベントの目標が達成できていれば、一般の方の参加者が少なくとも良いと思うので、そのあたりは検討しても良いのでは。

舞台に上がった人もそうだが、淡路島のプレイヤーや、近いエリアのプレイヤーの人たちを見ても、初めて見る人が多く、新しい世代の人たちが出てきたことを感じた。知り合いのメディア関係者の方に会場でお会いしたが、同様のことを言っていた。プレイヤーの掘り出しはできており、そういう意味で成功したと思っている。

これをどう継続するか、次のステップにつなげるかも大事であり、継続すればどんどん面白くなる事例もあると思う。そういう趣旨の事業ではないと思いながらも、うまく対処しながら継続できる方法を、あまり仕組み化せずに考えても良いと感じた。

○委員

こういう大きなイベントは単発で終わることが多いが、この事業は半年ぐらい前から仕込まれ、地域創生フェス当日が中間報告のような位置づけになっており、継続的なプログラムの中の1つの盛り上がりのような形をしていたことが特徴的だと感じた。プレイヤーの方々が刺激を受け、また次頑張ると思えるような、そういう立て付けになっていたことがよかったです。

当日、自分の家族も来場し、特に地域創生に興味があつて来たわけではないが、手裏剣体験や、ご飯もいろいろあり楽しんでいた。そういう意味でも、裾野が広げられるような要素もあるように感じた。

当日、私はステージにてファシリテーターをさせていただいた。普段はすでに実践されている方々のファシリテーションをすることが多かったが、今回のステージで実践されている方は5人中2人で、あの3名の方はこれから取り組まれる方であった。そこをどうファシリテーションするのか難しかったが、予定調和ではないパネルディスカッションもリアルで面白いと感じた。この「わちやわちや感」が、この地域創生フェスの1つの魅力だと感じた。

今後どう続けていくかについて、2つ意見がある。1つ目は、私がファシリテーターさ

せていただいたパネリストの方の中でも、コラボレーションプロジェクトの中でサポートし続けるのは難しい方々が何人かおられて、どちらかというと、ボランティアベースのものが多いように感じた。市町の社協の方が、この後の伴走支援には向いているのではないかという取組みや、社会貢献的な要素が強くビジネス要素が比較的薄い取組みもあり、地域しごとサポートセンターの支援が良い事例も見られた。今後、伴走支援ができない中のフォローとして、他の県施策と連携させるなど、例えば、ビジネスベースの場合は起業プラザと連携するなど、他の部局に跨ってしまうと思うが、そういうようなところと連携できればより皆さんをフォローしていくのではと感じた。

もう1点は地域創生フェスの開催地について、神戸だけではなくいろいろな地域を回っていく構想も想定されているかもしれないが、他の五国で開催する際は工夫が必要だと思う。淡路地域で開催予定であった別部署の交流会が、申込者が最低履行人数に届かなかつたとのことで、中止になる旨の連絡がきたことがある。各地で開催しようとイベントを仕掛けていても、人数が集まらず中止になると、それで盛り下がってしまう。神戸以外の地域で開催する場合は、神戸と違う仕掛けをしていかないと人が集まらない懸念がある。

○委員

私は空き家ステージにてファシリテーターをしていたが、出演者の方は自分のために活動しているというよりは、他の方のために活動している点で、出演者の皆さんがつながったことが印象的であった。例えば、南海トラフ地震が起こった際に、湾岸に住んでいる方が北播磨に移住ができるように空き家整備を行い、家島で活動されている方に関しては、小学生で不登校になった子供と親に滞在場所を提供し、相生・家島の学校に通えるように支援し、あるいは洲本実業高校の高校生が将来のいろいろなビジョンを描けるように、空き教室を使って民間と共創した活動を目指す方など、教育や将来世代のために活動される方も見られた。空き家活用は、障害が多く、実現できなかった事例も見られるが、人の役に立ちたいという思いで、何とか着地ができたというところが印象的であった。

空き家活用と、教育・将来世代が結びついた取組を見られたのは大きな成果だった。空き家活用は分野が広いため、例えばもし同じようなセッションを設けることになれば、空き家を使った将来世代の活動支援や、あるいはその教育のあり方を考えるなど、そういうテーマ設定を行い、取り組みみたい人が実践者と交わる機会が提供できれば良いと感じた。

○委員

資料内に、私からの地域創生フェス当日の提言を記載している。5つ提言があり、1つ目は今回の地域創生フェスで生まれた五国のご縁を活かし、兵庫を盛り上げてほしいという思いで書いている。2つ目は、今回の地域創生フェスで生まれたご縁を次回にも活かしてほしいという思いで書いている。3つ目は、神戸を皮切りに、他の五国でも地域創生フェスを開催してほしいという思いで書いている。4つ目は、キャラバン隊を結成し、次の地域創生フェスに参加いただき、取組みやビジョンを報告してほしいという思いで書いている。5つ目は、第三期地域創生戦略のキーワードは「幸せ」だと思っているため、「幸せ先進県」という造語だが、こういうものをを目指したい旨のメッセージである。

課題についてだが、様々な点において成功したゆえに、次回開催のハードルが高くなっ

てしまったように感じる。成功のハードルが高くなり、次から参加し辛くなると問題である。

さきほど委員が言わっていたが、コラボレーションの兆しが見られるが、その先が見当たらないという事例もあると思う。今回の事業は「地域創生コラボレーションプロジェクト」のため、コラボレーションの有無を成果としているが、実は本当の成果はその先だと思う。その先の成果を報告いただく仕掛けづくりをしたい。今回の地域創生フェスでコラボレーションしたその先の成果を、次の地域創生フェスで発表いただけすると、次につながっていくようになる。コラボレーションの結果、生まれたものを見える化することが次の課題だと感じた。

また、今回の地域創生フェスは人材発掘という意味でも良かったように感じる。あと、この地域創生フェスの仕組みそのものも、人材育成につながっているように思う。今回のような形式で登壇し発表する機会はあまりないので、人前で発表することでスキルも上がるため、人材育成面という意味では、かなり貢献できたように思う。

委員が言われたサポートが難しい人がいるという直感は重要で、行政関係者は、県や市の政策をある程度把握しているが、一般の人はそうではない。自分が取り組みたい事業はどのような行政サポートが受けられるのか、さらには、行政分野の取組みなのか、民間分野の取組みなのか、そのあたりも理解していない人もいると思う。そこに対する情報提供をどのように行うのか、参加していた方々の課題を誰がどのように解決するのか、まだ解けていないように思う。

また、いろいろな地域を回る際の工夫について、人口が少ない地域での開催はなかなか難しいだろうと懸念している。次は洲本で「アイデアソン」を実施予定だが、地域創生フェスの中の取組みだと位置づければ、地域創生フェスを淡路でも開催した実績となる。地域創生フェスは、ある程度人が集まらないと盛り上がらないため、アイデアソンをそういった位置づけにすることも視野に入れてみたら良いと思う。

充実した伴走支援があったとしても、コラボレーションできなかった参加者も何人かおられる。そこの課題については対応する必要がある。あと交流ブースについて、もう少し気軽につながれる場所が提供できれば良いように感じた。会場の広さによって、そういう設計も変わってくるため、そこは今後検討していくべきだと思う。

あとは、地域創生フェスの開催時期について、今年度は8月30日に開催したが、この時期の開催が良かったのか考へる必要がある。今年度は初の開催であり、準備も必要であったことと、補助事業を実施しないといけないため、この時期での開催となった。一度開催した経験ができたため、開催時期を前に倒すこともできるのではないか。というのは、補助事業の選定後、今年度の3月31日までに補助金を活用いただかなくてはいけないため、余裕のないスケジュールとなっている。

今年度は事業選定を9月に行うため、今年度の事業実施期間は半年ほどしかない。補助対象の人から見れば、もう少し余裕のあるスケジュールを組んでほしいように思う。そのため、地域創生フェスの開催時期について、前倒しにしてもいいように感じた。

○委員

他の委員も言わっていたが、行政が提供しているサポートのうち、どれが活用できるの

か分かりづらいのが課題に感じる。どういうサポートがあるのか、1か所に集約し確認できる仕組みがあれば良い。

今回の地域創生フェスでつながった方は、それぞれ取り組みたいことの規模もステージもバラバラのため、それぞれ違うサポートが必要だと感じた。どういうサポートを受けられるのか、探すハードルが下がれば良いと感じている。

○委員

居場所づくりを例にすると、神戸から遠方の地域で居場所を作る場合、地域性があるため、その地域のコーディネーターにつながないといけない。神戸のコーディネーターが、神戸から離れた地域の居場所づくりをサポートするのは困難。実際に、圏域を離れて市町単位のコーディネート機関につないだ方がうまくいくと感じる方が何人もいた。コラボしてからの次のステップへの設計をもう少し工夫できれば、もっと形になるかと思う。そこまでサポートするかどうかの判断は必要だが、サポートがあれば事業化できると感じる人は何人もいた。

○委員

地域創生コラボレーションプロジェクトの受託事業者は、プレゼンテーションのプラッシュアップはできると思うが、その後の事業展開のサポートまで求めるのは難しい。

○委員

補助金の採択事業者に対して、今後伴走支援していくのか。

○委員

伴走支援は行わない。補助金を出すため、成果の報告を求めることになる。

他の委員の意見を聞き、次の事業展開が一体誰と取り組めるのか、どういう補助事業があるのか、そういう情報が行き渡っていないように感じた。それを誰がどうやって発信するのか、そういったところが足りていないように感じる。

○委員

委員より、空き家×教育という話があったが、県立高校は総合的な探究の時間で、多くの高校で空き家対策を考えているチームがあり、また、地方だと地域の特産物を使った商品開発など、いろいろな分野に取り組んでいる。探究の成果を発表するときに、教育委員会が開催する会場は神戸が多く、地方から来る場合は交通費などの負担が大きく、参加できる生徒が少ないこともある。学校も忙しく地域の先生方が、その地域の高校を集めて、発表の場を設けることはすごく負担がかかり難しいが、例えば、県が五国を回って地域創生フェスを開催するときに、探究のテーマが合う学校があれば、その場で発表して、専門家の意見や、現場の話を聞く機会を提供する方法もあるのではないか。

○委員

発表機会があるか否かで、学生のモチベーションは変わってくる。ポスター報告でも良

いので参加する機会があれば良い。

○委員

県で「ひょうごユース eco フォーラム」を開催していると思うが、eco に関するテーマで、いろいろな高校生・大学生が発表して交流するイベントであり、多くの関係者も参加し、交流の場になっている。

ファシリテーターとして参加したことがあるが、学生の活気あふれるイベントであった。そういうイベントも参考にしていただきたい。

○委員

地域創生をテーマにすると、参加される学生は多いと思う。

○委員

探究の話だが、大学受験につながる。そういう場で発表したことが成果となる。成果を挙げる場を高校生に提供するのは、良い取組みだと感じる。

○委員

質問だが、当日、カケル隊の学生達の様子はどうであったか。

○委員

カケル隊は機能としてはすごく良かった。彼らに与えた役割は、いろいろなブースや発表を見学し、それを報告することであった。当日のブースの様子を見ていると、若い学生が訪問すると皆生き生きしていた。学生を参加させる意味は、大きかったように思う。

学生は、一般企業に就職する方が多い。また、東京に出る方も多い。学生には「東京に行っても、地元で頑張っている人たちがいることを、若いときに認識しておくことが大切。何かあったときには、地元に戻って再び挑戦する人生の選択肢もある。そうした人生のデザインやビジョンを理解するために、このイベントに参加するのだ」と伝えている。

サラリーマンが悪いわけではなく、複数の選択肢があることを若いうちに提示できるという意味はあった。学生・現場で活躍されている方双方に良い効果があったと思う。

○委員

今回、市町の行政職員の方も何名か来場されていたが、いろいろなブースを回り、興味のある方に声掛けする形であった。逆に市町の方が、「こういうプレイヤーとつながりたい、こういうことをしたい。」などと、どこかで宣言していただくような場所があれば、それに反応して出展者の方が市町の方に声掛けに行く、そういうつながり方ができればと感じた。

市町の方は、普段は自分の市町の範囲内の方々とつながる機会が多いと思うが、全く違う地域のプレイヤーとつながることがあれば、より全体が結びつくと感じた。

○委員

なかなか市町の方たちは広域の視点を持つ機会は少ない。この地域創生フェスは県だからこそ、こういう広域のプラットフォーム機能を発揮して人を集めることができた。委員の考えはとても良い視点だと思う。

○委員

資料1ページに記載の「伴走支援」は、地域創生フェスでプレゼンするまでの「伴走支援」で間違いないか。

○委員

間違いない。補助事業として選定された事業も、以降は自力で事業展開を行うような設計になっている。

○委員

地域創生コラボレーションプロジェクトとしては人材発掘がメインで、その後の育成は行わない立て付けになっているかと思う。伴走の仕組みがあれば、この補助事業採択の10件以外にも芽が出そうな方がいるため、事業化する価値があるかを示すことで、このプロジェクトで育成までするか、議論できるのではないかと思う。

○委員

伴走支援をし過ぎると、人が育たなくなる恐れもある。

○委員

私達は伴走支援する際に、撤退のマネージメントも大事にしており、どこで撤退するか見極めている。少し事業を展開してみてトライアルし、出来ることを見極めた段階で撤退することもある。今回の地域創生フェスでは、まだアイデアレベルの方が多く、その段階で撤退するとアイデアがアイデアのままで終わってしまう。そのため、事業化できるぐらいまでは伴走支援した方が芽が出るのではないかと考えている。

例えば居場所づくりをしたい方がいれば、1回トライアルし、そこまで伴走支援したらあとは自走していただく、私のイメージはそのような感じである。

○委員

何かを始めるときは、大小関係なく自分で決めて、自分で出来るかどうかを経験することが大事だと思っている。それさえできれば、どんな支援でも行えば良いと思うが、その経験だけは周りに言われてするものではない。地域創生フェスに参加している時点で、1つ飛び込んでいるところはあるかもしれないが。

企業研修を実施しても、どこまで支援するか課題となっている。相手次第のためルール化できず、それぞれの人たちが肌で感じて支援するしかない。でもそれを議論する意味はあると感じており、他の人が行った判断を知ることは、その人が今後どのように支援していくか決定する上での参考となる。

会社にインターン生が来ていたため、地域創生フェスに同行させていたが、すごく刺激を受けたようだった。インターン生に、プレイヤーの方々に話しかけ、名刺交換をするように促した。それができるか否かが重要であったし、名刺交換してから連絡できるかどうかも重要だと考えている。学生からすると、実践されているプレイヤーの方々と連絡をする余地はあまりないが、その中でどのように連絡を取り続けるかが重要なので、少しコツだけ教えて実践いただいた。

そういう縁の作り方や、次のステップへの行き方のコツだけを伝えた後は、自走していくだけ立付けてでも良いのではないかと思っている。

○委員

第三期地域創生戦略が今年度始動したが、第四期地域創生戦略のことも視野に入れても良いのではないかと考えている。第四期地域創生戦略をどういう設計にするのか、地域創生コラボレーションプロジェクトや地域創生フェスの場でアイデア募集できるのではないかと感じている。第三期地域創生戦略の取組の浸透にもつながるし、第四期に向けて、どういう形で改善し、どういうものにしたいか意見を公募できるのではないか。

第三期地域創生戦略は企画委員会を中心に議論し策定したが、多くの人から意見やアイデアを聞けるルートを作っても良いのではないかと考えている。そういうルートを作ると、いろいろな県民・プレイヤーの意見を取り入れた第四期地域創生戦略が作れるのではないかと思っている。

○事務局

先ほどの委員のご意見について、たしかに県民の方から意見を聞く機会は少なく、地域創生フェスなどの場で第三期地域創生戦略の理念を浸透した上で意見を聞くことは良いと感じた。

第三期地域創生戦略はコラボレーションの輪を広げることをメインとしており、地域創生フェスを開催させていただいた。他に、縁を広げるための具体的な事業のアイデアが何かあるのではないかということで、地域創生フェスなどの場で新しい県の施策を探っている。

地域創生フェスについて、当日は約1,000人の方に来場いただき、また、県議会議員や他の関係者の方からも高い評価を受けた。たしかに多くの方に来場いただけたが、おそらくプレイヤーの方々の知り合いが中心だったのでないかと思う。

地域創生フェスがどういうものか分からず、案内はしたが市町の方はなかなか来ていただけなかったように思う。今回開催して、おもしろい取組みであり、つながりができる場所だという実績ができたため、次からは市町の方も参加したいと思えるようになったのではないかと感じている。

また、カケル隊の存在が大きかった。会場全体が明るくなるし、自分のやりたいことを実践する生き方もあるのだと知っていただけたことに意味があった。今度は大学や高校にもっと声を掛けていく必要があると思うし、市町やいろいろなサポート機関に声を掛け、そういったところからサポートのつながりが生まれたらいいなと感じた。

あと、地域創生フェスの目的を明確化させる必要があると思っている。個々で活動して

いる人たちの多くは、横のつながりがあると新しい取組みが生まれ、あるいは地域のつながりができると播磨で活動していた人が、但馬で活動ができるようになるなど、そういう「つながりを生む」ことが、この地域創生フェスの目的だと思っている。

ただ一方で、プレイヤーの発掘や成長支援は、「つながり」の部分からはニュアンスが違っているように思う。今回補助事業を実施したが、さらに伴走支援をしていく選択肢もあるが、そういうことは、この地域創生フェスのねらいと合っているのか気になった。

また委員が言われたような、学生に来ていただき、いろいろな新しいつながりや気付きを得ることで、プレイヤーの方のモチベーションを上げる場は良いと思うが、プレイヤーを発掘し育てる場であるかと言われると疑問が浮かぶ。いろいろな機能を盛り込んだ地域創生フェスももちろん良いかもしれないが、特徴を持たせるなら、プレイヤーを育てるというよりは、いろいろな人が「集う」にフォーカスをして、その機能をもっと高める考え方もあるのではないか。

○委員

地域創生コラボレーションプロジェクトは付随的な機能が入っており、私たちもそれを評価しているが、地域創生フェスの目的の明確化は必要である。おそらく、プレイヤーの発掘よりは「交流」がメインだし、それによって新しい価値を見出でもらうことが本流であり、あとはサブとなる。そこは外してはいけない。

第四期地域創生戦略の話だが、時期が来たら地域創生フェスで次期戦略を考えるイベントを開催しても良いかもしれない。それに向けて、来年の地域創生フェスで現在の取組みなどの周知のベースを設けても良いかもしれない。実現したいアイデアや、評価などを聞ける仕掛けづくりをしていけば、次期戦略の策定につながるのではと思った。

では、次の議題に移る。資料の説明をお願いする。

<参画事業に関する委員報告>

【事務局から資料1（P18～P19）を説明】

○委員

多文化共生社会検討実務者会議座長との意見交換会で、日本に住まわれている外国人の方が、世代を重ねると教育へのアクセス・継続が困難であり、就職の選択肢が非常に限られてしまう点が印象に残った。

また、見た目で外国人だとわかりにくい人は、サポートが行き渡りづらい状況もある。一目で外国人だとわかる人には、寛容になりサポートを行おうとするが、見た目が日本人に近しい人には、その必要性が分からず、サポートされないこともある。

展開されている施策は期間が限定されており、「定着」という観点までのサポートが不十分だと、現場の視点では感じる。

今の日本人を中心した教育システムが、大きなハードルとなっており、サポートについてバリエーションが必要だというところに対応できていない。

○委員

高校進学が大きなハードルとなっており、結局、中学卒業だけでは就職する先がかなり限定されてしまう。そういう問題が起こり、なかなか貧困の穴から抜け出せない状態にあると聞いた。今の日本の社会の仕組みは、高校を卒業したことを前提に作られている。そこは留意すべき点とのことだった。

日本に住んでいれば当たり前だが、学校制度に限らずあらゆる制度が日本人仕様になっている。ごみをルール通りに外国人が出さないと日本人は怒るが、でもルールを知らないかもしれない、というところまで気持ちが回っていない。ルールを知っていれば、きちんと分別もできるようになると思うが、その行政サポートがあっても、その情報が行き渡ってない、多言語化ができていない課題がある。その点については、ある程度の寛容さが求められるものの、最近はやや寛容さが不足しているとのことだった。

座長と解決方法について意見交換したが、外国人の方の生活を知ることや、関わることが一番だとの話であった。なので、サポートする団体は、そういう点を意識したり、あと若いときから外国人の方の生活を見ていただき、関心を持っていただくような施策展開があれば良いのではと話していた。

○委員

委員ご指摘のとおり、高校受験のハードルは高いと思う。県の教育委員会も外国人用の特別枠を設けているが、来日直後の数年という縛りがあり、世代を超えて長く暮らす外国人に対しての特別な支援は、教育の中ではあまり充実していない。入試になると、公平性の観点も求められる。なので、長く日本に滞在するのであれば、勉強は自力でするべきであり、そこは日本人と同等の扱いという観点は確かにある。

ただ、この外国人枠について、日本の社会環境も変化しており、高校授業料の無償化も始まり、公立高校の定員割れなども起こっている。公立高校の役割を考えていくときに、教育委員会も、外国人枠のあり方については再検討の時期に入っているのではないかと思う。その時に、こういう場で出た話が教育委員会にも情報提供され、本当に何が必要か議論できれば良いと考えている。

○委員

外国人の特別枠について、大阪は結構充実しているようだ。大阪レベルとは言わないが、兵庫県は少ないので、との意見も出ていた。

【事務局から資料1（P20～P21）を説明】

○委員

ひょうごオープンファーム強化事業の視察先の方は、以前高校の教師をされており、農業の先生として、農業に従事する若者を育てていたが、今の農業は生産性が不十分であり、教え子が農業に携わる機会が少ない状況にあった。教え子から農業に従事したいという話があり、自分が農業の可能性を拓げる立役者になれないかという思いで、教師をやめて専業農家として農業に従事し始めたとのことだった。教え子の給料を出すには、農業

収入だけでは不十分だったため、オープンファームも含めて、近未来の農業を自分が実践していくことを目指しておられる点で、非常に感銘を受けた。

地域の協力が不可欠であり、耕作放棄地を借りて、そこを2年半かけて、農業ができるように整地したことだった。作るものについては、ある程度収益性が高い落花生に挑戦されている。落花生の生産量が多い千葉県は砂地なので、落花生が育ちやすいが、耕作地の地質を変えて落花生で、収益が上がるよう努力されていた。また、落花生の収穫も非常に人気があり、オープンファーム事業を始めてから、大阪のアパレル会社の方々が体験に来たりと、いろいろな人とつながれるようになったとのことだった。

今は耕作放棄地の空き地に、収穫したものを料理して食べるための建物を建てたいが、予定地が農地のため、法的な規制が非常に厳しいとのことだった。しかし、過去の行政職員の経験から、法の解釈やいろいろな人のつながりのお陰で、建物を建てられるようになったとのこと。

現在では、出身校の猪名川高校と連携されており、加工品で付加価値を付けていろいろと売り出しており、新しい農業で成功しているように感じた。さらに、教え子がその教え子につないでいく形でつながっていけば、非常に魅力のある取組みだと感じた。

オープンファームについて体験させていただいたが、もう一度行きたいと思える内容であった。できたら何度も足を運び、育てる過程を見て、一緒に育てる喜びなどの農業の本質を知っていただき、拡がってほしいと話されていた。

○委員

彼は元教職員であり、行政に近い立場であったから、行政の仕組みを理解しつつ、オープンファーム強化事業の制度を利用し、成功できたのかと思う。

結局そこに課題があるという認識を持たないといけない。制度利用までたどり着かない人達がいることの認識を持つ必要がある。

<地方創生 2.0について>

【事務局から資料1（P22）、資料2、参考資料1を説明】

○委員

石破首相が打ち出した「地方創生 2.0 基本構想」だが、今までの地方創生の考え方から大きな変化があった。今までの地方創生は、人口減少への対応が中心であったが、地方創生 2.0 では、人口減少を受け入れた上での対応を打ち出しており、大きな転換があった。それに応じて、各自治体で策定している総合戦略について、見直しを要求された。ただ、地方創生 2.0 基本構想と第三期兵庫県地域創生戦略を比較すると、おおよそ網羅できていた。そういう意味では、兵庫県は国に先駆けて、国と同じような方向性を打ち出していたため、戦略の見直しを行う必要はないと判断している。

○事務局

地方創生 2.0 の中で一番目新しい事業は「ふるさと住民登録制度」だと思う。定期的に毎年訪れるなど、どういうつながりでもいいが、そういった居住地以外の地域とつなが

る、それを「ふるさと住民」と定義して登録する制度が非常に大きな打ち出しである。実人数1000万人を目指す目標が掲げられている。少し懸念していることは、登録者の数で比較されてしまうのではないかという点。兵庫県は多様性のある地域なので、もちろん県外の登録者も増やさないといけないが、地域創生フェスのような、いろいろな人たちが交わる、地域を知ることができる場があると、こういった制度の登録にもつながっていくと思う。そういう意味でも、地域創生フェスのような取組みは重要だと思っている。

○委員

人数競争はナンセンスに感じる。大事なことは活動量や成果である。活動的な人に登録していただき、実際に動いてもらう方を大切にしたい。

○委員

洲本市について、関係人口を増やすために学生を呼び込む活動を長くしており、年間1,000人くらいは来ている。

ただ、「何人来た」という評価軸だけでは、地域に何が残ったのかは評価できない。そのため、この評価をどのように作るか考えていた。実際に、地域に学生が来て、実は好きになり何回か来ている人もいるが、何もしないと追うことができない。

○委員

行政改革目線で考えたときに、行政の世界は三角形になっており、政策・施策・事業で政策体系を形成している。8つの方向性はおそらく施策であり、その中にいろいろな事業がぶら下がっている。この全体の設計がうまくいっているのか、本当はここで議論しなければならない。

個々の事業の視察に行っているが、全ての事業を視察することは物理的に無理である。ただ、事業が8つの方向性をうまく射程内に収めて、きっちり機能しているかどうか、チェックしないといけない。その部分は、今後考えていかないといけない。

今回は戦略が始動して1年目なので、成果がまだ出ていない。次年度以降、今年度の成果が出てきたら、事業の進捗を見て、プロジェクトがうまく回っているか否か、この委員会でチェックしないといけない。

○委員

戦略と施策という考え方でいうと、住民の方々へ戦略と施策のつながりが見える見せ方をする必要があるという意見を聞き、今の取組みでは不十分を感じるため、来年度実施していくときは、そこも考えないといけない。

会社でも同じで、上位戦略の周知について、それが自分の仕事につながっているという実感が大事となる。

○委員

戦略を周知するべきだが、戦略そのものが周知できていなくても、実際に機能していれば良いのではないかという考え方もある。ただ、先ほど言ったように、第三期地域創生戦

略を超える次期戦略を策定しないといけない。

そのため、次期戦略の策定を考慮しながら、第三期地域創生戦略を機能させていかないといけないし、次期戦略策定の公募戦略も考える必要がある。

議論のまとめに入る。本日は今年度の取組みの反省を踏まえ、次年度の改善について議論した。特に重要だと感じたことは、事務局が言われた「地域創生フェスの目的の明確化」である。地域創生フェスは多くの成果があつたが、本来の目的を忘れないことが重要である。プレイヤー同士に交流いただいて、新しいコラボレーションで成果を生み出す、ここが本来の目的であることは念頭に置かないといけない。

今年度の取組みに対する反省点だが、地域創生フェスの運営面について、基本的に良かったが、1回目の開催ということもあり至らない点はあった。そこについては次年度に向けて改善していきたい。

思いを持つ人々の想いを、どのように実現へと導いていくかというプロセスに対して、我々のプロジェクトがどこまで寄与できるのか、あるいはどこまで伴走すべきなのか、そして、戦略や施策をどのように伝えるべきか、またそれが適切に伝えられているのか、の点について課題を感じている。成功している人たちの事例はあるが、その人たちは情報を持っている人が多いように感じる。情報を持っていない人たちに対してどのように情報提供するのか、また、長期で伴走するわけにはいかないので、どう撤退するのか、そういうところを誰がやるべきなのか、今後考えないといけない。

また、次期戦略のことも考えながら取り組んでいかないといけない。地域創生フェスという素晴らしいツールを持つことができたため、それを生かしながら、次期戦略策定についても考えていきたい。

あとは委員が意見されたとおり、市町との連携を強めるべきであり、また人材発掘や育成にも寄与できるような地域創生フェスになっていたと思う。また、大学生・高校生のカケル隊の参画について、重要だったと感じる。

広報については、一度開催した実績ができたため、より一般の方たちの参加を促すため、次年度は今年以上に力を入れて広報を行っても良いと思う。

○事務局

本日も熱心に議論いただきお礼申し上げる。第三期地域創生戦略が今年度始動したが、シンボル的なプロジェクトの1つが、地域創生フェスだと思っている。地域創生フェスの結果が、地域創生戦略の評価に関わるのではと思い、成功するか否か危惧していたが、皆様のおかげで、期待以上の盛り上がりを見せ、いろいろな方から良い評価をいただいた。是非この事業を、兵庫県が誇るイベントに成長させていきたい。本日は貴重なご意見、アイデアをいただいたため、次年度の地域創生フェスに生かしていきたい。

また戦略推進プロジェクトの推進についても協力いただきお礼申し上げる。委員が言わされたように、体系的に評価していくための整理を進めていきたい。